

週日の説教

金 大烈 神父 2011年10月18日(火)

《イエス様を信頼して ～他のことを気にする必要はない～》

今日の福音(ルカ10・1-9)を読んで、いろいろなことが思い浮かびました。

一つは、なぜイエス様は弟子たちを遣わす時に「財布も袋も履物も持って行くな。」という極端な言葉をおっしゃったのか、ということです。今の時代だけでなく、この福音の時代でも不可能な話です。お金なしにどのくらいの距離を行けるのでしょうか。お金なしに何日間過ごせるのでしょうか。それなのにイエス様がわざわざこのような言い方をなさったのはなぜでしょうか。

この話は、何年か前にも申し上げたことがあります。イエス様はこの言葉によって、「あなた方は、これらの物ではなくて、私に対する信仰に頼らなければいけない。全てにおいて私を頼れば、食べるものも寝るところも着るものも全部何とかしてあげるから心配することはない。信頼する心、み言葉を述べ伝える心だけを忘れないようにしなさい。」とおっしゃっているのです。福音より食べ物や着る物、その他の『物』を重視してはいけない、ということです。あなたが遣わされた目的をいつも意識しなさい、という言葉でしょう。

「あの人はあれほど金持ちなのに、ふさわしい信者と言えるのでしょうか。」と、とんでもない話をする人がいます。これは完全な間違いです。お金を儲けることができるのならば、儲けてください。良心的に儲けて、正しく使ってください。金持ちは無条件に悪い人で貧しい人は無条件に善い人、そんなことはありません。貧しい人の中にも悔い改めなければならない人はたくさんいます。そして、金持ちでも本当に立派な素晴らしい生き方をする人もいます。

問題は、金や物があるかどうかではなくて、心をどこに置いているのかの問題だと思います。

二つ目です。イエス様が、「どこかに泊まる時には、その家に平和があるように願いなさい。もしその家に平和がとどまらなければ、その平和はあなたがたに戻って来る。」とおっしゃっています。

この言葉に対して、私たちはどのような生き方をしているのでしょうか。もし、優しい心で誰かに近づいたのに、その人の反応が冷たかったり、軽んじたりするものだったら、皆様は戻って来る平和を体験しますか。そうではなくて腹が立つのでしょうか。優しい心で近づいて手を伸ばしたのに、この人は何なのだろう、と思うのではありませんか。もし、善い心、優しい心で手を伸ばしたのに、相手の反応によって自分の気持ちが崩れてしまうとしたら、本当に善い生き方をしてはいない、ということです。私も同じです。自分では善いことをするつもりで手を伸ばしたのに、嫌な反応をされれば、腹が立ちます。

しかしイエス様は、今日の福音をとおしてはっきりおっしゃっています。「もし善い心でしたのならば、相手の反応は気にしなくてよい。あなたがすべきことをすれば、それでよい。」そのような気持ちが私たちの身につけば、もっと余裕のある、もっと寛大な目で相手を見られるのではないかと思ひ

ます。

善いことをしようとすれば、悪魔は必ずいたづらをします。だからこの世は、天国ではなくて「この世」なのです。本当に善いことをしたのに相手が嫌な目で見るとしたら、それにがっかりしないで、「善いことをするから悪魔がねたんでいるのだ」という気持ちになり、もっと積極的に善いことをしようと頑張りましょう。「一日かけて善いことをしたのに反応がない」といって寂しい気持ちになるようでは、子どもと同じです。子どもならば、そのような反応を見せてもよいでしょう。しかし皆様は大人で、しかも信者の生活をしてご聖体をいただいているのです。反応のないことにがっかりしていたら、子どもと同じになってしまいます。それでは、子どもたちに「頑張りなさい」と言えないでしょう。子どもとは違う心が必要です。この共同体でもよくそういう姿が見られます。何でもないようなことに嫌な反応を見せる人がいるし、その反応に傷つけられて信仰の生活から離れてしまう人々もいます。そのような幼い感情から卒業しましょう。

三つ目です。「働き手が足りない」という言葉もありました。

数日前に、ある外国人の信者さんが「20年後には、おそらくこの太田教会も日本人の信者はほとんどいなくなるのではないのでしょうか。」とっていました。外国人の目にもそのように見えるのです。だから私は4年前から、もう少し積極的に宣教しましょう、と言って来たのです。しかしあまり変わっていません。まだまだ、消極的に、自分のことばかり考えて信仰生活をしている雰囲気が残っています。そのような姿を見ると、私も降参しなければいけないのか、という気持ちになります。

この教会は、20年後、30年後にはどうなるのでしょうか。一人ひとりが、もっと意識すべきです。意識しないのは、教会を愛していないという証拠です。一人で信仰の生活をするのは、あり得ないことです。信仰というものは、共にするものです。分かち合わなければ絶対に信仰とは言えません。好きな人でも、好きではない人でも神様の前に分かち合うのが信仰です。他の人が持っていないものを持っていれば、それを人々に見せなくてははいけないのです。

そういう気持ちで、私たちの未来の教会、子どもや孫たちがこの教会で生活することになるかどうか、もう少し深刻に考えていただきたいと思います。

働き手だけでなく、収穫する者さえ見えなくなる時代にならないように、祈りの中で覚えましょう。

ありがとうございました。